

HATSUMONO DANNSHI NO KAMIKAKUSHI

初物男子の神隠し



成人向
FOR ADULT ONLY



竹鋸村宮
竹鋸村
バス

竹鋸村 ↔ 竹岡北駅

	平日	土日
6	30	30
7	30	30
8		
9		
10	30	
11		
12	30	30
13		
14		
15	30	
16		
17	30	30
18	30	30

遙か昔に失われし祭り… 今、ここに蘇る!

奉筍祭 復活!

村民祭
同時開催

みんな
来てネ!

竹鋸村物産即売会

13L級グルメ大会

たのしいイベントもいっぱい!

御市競り市
ほ男子撮影会

ご当地ゆるキャラ

のこ
鋸ちゃんとおそぼう!



あの鋸ちゃんが会場にやってくるヨ!

主催：奉筍祭実行委員会
開催日時：2011年1月1日
場所：竹岡県 竹鋸村
奉筍祭特設会場

交通：当日は隣接の竹藪市の駅前より
村営無料バスを随時運行

※写真はイメージです。

祭式次第復元監修：竹岡大学准教授 冷田礼三郎

奉筍祭 寒袂縁起

其乃昔 竹鋸乃国竹鋸村に邪神在り

神通力を用い村に禍を為し

毎年正月 美童を貢さしめ 此を食る

貢がざる年は禍甚だし

村人困窮したる所

旅の行者 此れを哀れみ

法力にて 邪神 石仏に封ず

行者去りし後 毎年元旦

穢れ無き男児 斎戒沐浴し

筍乃滝 滝壺洞に在りし封神岩にて

護符 注連縄を奉り

封じ乃儀奉れり

爾後 村の静謐は保たれり

竹岡県立図書館所蔵
(竹鋸の国風説録より抜粋)

《舞台となる二つの史跡》



筍乃滝

青く透き通る川面にそそぐ筍乃滝。
この滝の上に伝説が伝えられる洞窟がある。
神秘的な光景であるがゆえに水温はとても低く過酷なものといえる。



石像群

御神石のちからによって邪神を封じたとされる石仏。
現在、その石仏の行方はわかっていないが、竹鋸村の各所に古く
からある石仏のどれかが、その石仏なのかもしれない。

遥かなる時の彼方から、少年たちが繋いでいく未来へ向けて
古の儀式を継いでいくことにより、
地域の未来と、少年たちの未来に幸有らんこと願って

「うあつ、痛っ！やっぱ無理だつてコレはっ！」

川の水につま先を入れた、禪姿の少年が悲鳴を上げて飛び上がると、周りを取り囲んでいた見物人たちがどつと笑う。

「ソウスケっ！往生際が悪いぞっ！さっさと飛び込めっ！」

「うるせーっ！冷たいを通り越して痛いんだぞっ！マジで死ぬって！」

気楽に囃し立てる部活の仲間に、颯介は本気で怒鳴り返す。

「まったく、洒落にならないぜ……」

颯介は、焚き火に足を炙りながら、白い息を吐いた。

快晴に恵まれた元旦の早朝、普段は人が立ち入ることはほとんど無い、竹鋸神社の裏山にある小さな滝の、滝壺に近い川べりに、数十人の人ばかりが出来ていた。

その中心では、真冬の冷氣の中で、鉢巻に禪一丁という、ほとんど全裸の少年二人が寒さに震えていた。

赤い鉢巻をした、整った目鼻立ちのイケメンは、竹鋸中学校空手部の主将で二年生の、舟見颯介。

体格は年相応だが、鍛え抜かれ、引き締まった形のよい見事な筋肉が全身を覆っており、なんとか自分で着けた禪は、かなり緩めだ。

青い鉢巻をした気の強そうなワンパク顔の少年は、竹鋸小学校六年生で、少年野球チームの尾崎龍次郎。

日焼けしていない部分も艶やかな褐色の肌に、良く引き締まった均整のとれた体の少年で、いまだに禪を着けられずに悪戦苦闘している。

その二人に与えられているのは、ムシロ一枚に焚き火だけ。

寒空の下、囲いも無しに、大勢の見物人に見られながら、全裸になって禪を着用させられているのだ。

「だから、撮るなって言ってるだろう！」

その龍次郎は、布の間から包茎チンポを出したまま、カメラを向けている大勢の見物人達を怒鳴りつけるが、正面を向いたチンポに向けてさらにシャッター音が襲い掛かるだけだった。

既に禪を着けた颯介も、当然、冷やかに来た部活の仲間やその他の見物人全員の前で全裸を晒し、半剥けチンポも写真に撮られ放題だった。

さらに、写真だけでなく、ビデオカメラで撮影している人間も複数いるのだが、誰も咎めようとはしない。

「……ちくしょうっ、秋元め！話が全然違うじゃねえかっ！」

颯介は、自分をこんな状況に追い込んだ空手部の顧問教師を呪った。

村おこしのために、地元の竹鋸神社が古い祭りを復活させるらしい。

颯介がその話を聞いたときには、自分には関係の無い話だと、完全に聞き流してすぐに忘れていた。

しかし、その『祭り』が十代の少年に限定の『寒みそぎ』であり、いまだに、そんな行事に進んで参加してくれる十代の若い氏子などいるはずもない神社が、地元の学校を頼るのは必然だった。

そして、こういう場合に真っ先に狙われるのは、やはり、命令系統のしっかりした運動部の生徒で、今回は、地元中学校で空手部主将の颯介が、貧乏くじを引かれたのだ。

建前上は「自ら希望した」ことにされたが、もちろん、実際は、顧問教師に頼み込まれて仕方なくだった。

そして、地元の少年野球チームのエースで四番だという、小学生の龍次郎も、断れない状況に追い込まれての参加なのは想像に難くない。

しかも、事前に聞かされていた話では、『寒みそぎ』は神社の境内にある池でやるはずで、社務所で着替えて、池に入って軽く水浴びをしてから注連縄を神社に奉納する、という程度のものであったはずだ。

ところが実際には裏山の川で、しかも『男の子だから別にいいよね』と、社務所どころか囲いすらない川べりで着替えさせられ、『準備中は公開しないから』と言っておきながら、見物人を規制する用意を何していないので、実際は見物人が二人の全裸を見放題なのだ。

そして、本番の『寒みそぎ』自体も、案の定、聞かされていた話よりも、比べ物にならないくらい、過酷だった。



「仲がいいのは解るけど、やることはやっちゃおうよ。ね？」

ミコトは笑って片目をつぶると、虚を突かれた颯介と龍次郎を尻目に、御神石のある洞窟へ続く石の階段へ向けて悠然と歩き始めた。

「お、おうっ！ そうだな。いくぞ、リュウ！」

颯介の言葉に、龍次郎もバツの悪い顔をして頷く。

実は、『奉筭祭』の神事としては、むしろここからが本番だった。

去年までは、ただ単に竹鋸神社の神職が、御神石に新しい注連縄を巻き、新しい護符を納めるだけの儀式だったのだが、今年は村おこしとして、失われていた本来の形で、『奉筭祭』として復活させたのだ。

具体的には、寒みそぎで身を清めた少年が、自ら身に着けて清めた注連縄と、洞窟の中の御神石に巻いてある去年の注連縄とを交換して、新しい護符を納めるという行事になった。

だから、更衣スペースはなおざりな神社側も、祭りのメインである御神石への導線はちゃんとロープを張って確保していて、いつの間にか、さらに増えた見物人が両側に鈴生りになっていた。

颯介と龍次郎は、川を上がったところで竹鋸神社の神職から護符を受け取ってから、その人垣の間を足早に歩いてミコトを追った。

「この中に入るのかよ…」

洞窟の入り口に立った龍次郎は、そう呟いて顔を不安に曇らせる。

龍次郎は今まで、禪一丁で真冬の川に入る寒みそぎのことで頭が一杯で、その後の事はまったく考えていなかったのだ。

洞窟は人間が二人並んで歩くのがやっとな程度の幅と高さで、まったく日の光が入らず、数メートル先も暗闇に閉ざされていた。

そして洞窟の周囲には、見物人はもちろんのこと、寒みそぎを済ませた少年以外は竹鋸神社の神職すら立ち入りを禁止されていて、今は颯介たち三人しかない。

「心配ねえよ。元々、年に一回は神社の人間が御神石の注連縄を取替えに来てたはずだし、今年からは、今日のために裸足で歩いても大丈夫なように整

備したって話だからな」

完全に怖気付いている龍次郎を見て、颯介は軽く肩に手を置いて励ます。

「それと、中に入っただけで、こっそり懐中電灯が置いてあるよ」

「あ、そうだったか？」

颯介も実は、打ち合わせに集中していたとは言い難かったのだ。

洞窟に入っただけで、確かに懐中電灯が二つ置いてあった。

そして、三人で五十メートル程進むと、少し開けた空間に出た。

「これだな、御神石。…おもったより小さいな」

その空間の中心に、ちょうど学校の机くらいの高さで幅の四角い石が立っていて、その上にサッカーボールほどの石が載っていた。

注連縄は小さい石のほうに二本掛けられ、護符はその石に立てかけるようにして置かれている。

「さっさと済ませて戻ろう。もう限界だよ」

「ああ、そうしよう」

龍次郎は、ガタガタ震えながら急かし、颯介も当然異存は無かった。

「まず、その前に、御神石の向きを変えないと！」

颯介が自分の腰の注連縄をはずすと、ミコトが慌てて止める。

「毎年、石の向きを百八十度変えているって、言ってたはずだよ」

「そうだったか？…こうか？」

颯介は、ミコトに言われるまま、御神石をくるっと回す。

「ありがとう」

ミコトがそう言っただけでニヤリと邪悪に笑うのと同時に、颯介と龍次郎の視界は真っ暗になる。

「えっ？」

そして次の瞬間、足元にぽっかり穴が開き、正体不明の巨大な渦が二人を飲み込んで、颯介が筆り取られるほどの力でもみくちゃにされながら、真っ暗な暗闇の中を落下していった。

「うわああああっ！」



「うあああつ！」

「…っん…んん？…なつ、なんだこりやつ！」

龍次郎の悲鳴で意識を取り戻した颯介は、自分の置かれた状況をすぐには理解できなかった。

「…？これは、いったい…」

なんとか、自分が全裸のまま、腕を頭の後ろで縛られて、さらに両足を縄で括られて逆さ吊りになっていることは理解したが、なぜこうなったかは、まったく理解できなかった。

「うあ、うあああつ、来るな、来るなあああつ！」

背後からは、龍次郎の悲鳴が続いているが、身動きが取れないので龍次郎の状況はまったくわからない。

しかし、その理由は颯介にもすぐに判った。颯介の左足に白蛇が巻きついてきたのだ。

「くそおつ、コレかつ」

白蛇は、ゆつくりと、しかし確実に颯介の左足を這い降りてくる。

颯介は龍次郎のように悲鳴こそ上げなかったものの、前身に嫌な汗が噴き出すのを自覚した。

「ああ、やつと気がついたね」

突然、横から聞こえてきた場違いに明るい声に、颯介が驚いて首を右に捻ると、すぐ近くに逆さまのミコトの笑顔があった。いつの間にか、勾玉のような首飾りをしていたが、やはり全裸だ。

どうやら、颯介は立っているミコトの頭の位置に颯介の頭がくる位の高さに吊られているようだった。

「おまえっ、…お前は無事だったのか？」

咄嗟に出た自分の言葉に、颯介はすぐに違和感を覚えた。

…そもそも、コイツは誰なんだ？

奉筭祭に参加する三人目？

しかし、神社側からの説明は、あくまで自分と龍次郎についてだけで、三人目については一切何も聞かされていない。

寒みそぎでも、注連縄を着けたのは自分と龍次郎だけ。

護符を受け取ったのも自分と龍次郎だけ。

用意された懐中電灯も二つだけ。

…誰が、三人目なんて言ったんだ？

その颯介の表情の変化を見てったのか、ミコトも表情を一変させて、一気に邪悪な笑顔で颯介の顔を覗き込んだ。

「そのことにも気がついたようだね。なかなか賢いじゃないか」

「…おまえは誰だ。これはお前の仕業なのか？」

颯介は、逆さ吊りで頭に上った血が引いて行くのを感じながら、かろうじて冷静に問い詰める。

「カミサマさ。お前たち人間が祭っていたモノだ。お前が御神石を動かして封を解いたおかげで、久しぶりに自由の身だよ。礼を言うぞ」

「だったら、神様じゃなくて悪いヤツじゃないか！」

白蛇に悲鳴を上げていた龍次郎が、涙声で話に割り込む。

それを聞いたミコトこと自称カミサマは、ニヤリと笑い肩を竦める。

「あゝあ。言っちゃったね。せっかくカミサマらしく振舞ってあげようと思っていたのに。そう言われたら、期待にこたえて邪神らしく極悪非道に振舞ってあげなくちゃね」

ミコトの言葉と同時に、颯介の足に絡み付いていた白蛇がさらに這い降りてきて、剥きだしの淫褻をチロチロと舌で嘗めはじめた。

「まずは、二人に男の子に生まれてきたことを後悔させてあげる」

「ひぎやあああああつっ！！」

一足先の龍次郎の絶叫を聞きながら、颯介は、白蛇の口が大きく開いて、自分の金玉に牙を衝き立てる瞬間を黙って見るしかなかった。

「うぎあああつっ！」



「ああっん、ああっん！……う、うそだあつ」

颯介は、自分の口から漏れた、信じられないくらい甘ったるい声に驚いて必死に否定するが、朦朧とした頭は既に口のコントロールをすっかり失っていて、大きく開けたままの口からは、次々と甘い喘ぎ声が漏れ出て行く。

なぜこうなったのかは、やはり分からない。

逆さ吊りのまま白蛇に金玉を嘔まれて、想像を絶する激痛に意識を失ったところまでは自覚があった。

しかし、尻の穴の痛みで意識を取り戻したときには、逆さ吊りからは降ろされて、後ろからミコトにアナルを犯されていたのだ。

頭の後ろで手を縛られたまま、明らかに自分より体の小さいミコトに後ろから抱え上げられているにもかかわらず、なぜか、まるで二メートルの大男に抱えられているような感覚だった。

「無理をしないで。もっといい声で鳴いて聞かせてよ」

ミコトはそう言いながら、颯介の左の乳首を摘みあげて揉みしごく。

「はああんっ！」

左の乳首に走った電撃のような快感に、颯介は全身を仰け反らせて喘ぎまくった。

乳首だけではなく、まるで全身が性感帯になったかのように、ミコトの与える刺激はすべて、想像を絶する快感に変わるのだ。

また、最初は痛かったはずのアナルも、経験した事の無い快感に疼きまくり、ミコトの動きに呼吸を合わせて、ミコトのペニスを締め付けている。

颯介自身の半剥けペニスも、完全に勃起して綺麗に剥け上がり、透明な粘液をだらりと大量に垂れ流していた。

「よし、いいぞ。もっと呼吸を合わせろ」

「はあっ、あん、ああんっ！……でもっ、こんなあつ」

それでも颯介は、快感の奔流に必死に抵抗しようとする。

「やれやれ、強情なヤツだね。あきらめろ、白蛇がおまえの金玉に注入した毒は、人間にはもつたないほどの極上の催淫剤なんだから」

「さいいんさい？」

「そうだ。だから、お前がこのまま快感に溺れまくっても、それは白蛇の毒のせいだ。仕方が無いんだ」

「毒のせい……」

そう聞いた颯介の顔から、わずかに残っていた理性の灯がついに消えて、全身の力を抜いてミコトに全てを委ねてきた。

「……オレって、やさしい邪神サマだなあ」

ミコトは満足そうな顔で、ようやく完全に落とした颯介の肉体を改めてじっくりまざる。

形のよい大胸筋をなぞり、ぷっくり勃起した左右の乳首を颯り、綺麗に割れた腹筋を一つずつ確かめて、へそに人差し指を突っ込む。

颯介はその全ての行為に対し、あられもなく快感に悶え喘ぐのだ。

そしてついに、颯介の脇の下を嘗めながら、完全に勃起して透明な粘液で濡れ光るペニスに手を掛けた。

「ああんっ、もう、出るっ！」

颯介は、ミコトの手が触れた瞬間、強烈な勢いで射精して自分の腹と胸、そして顔を精液で濡らしてしまう。

「あゝあ、駄目じゃないか。オレが良いって言う前に射精したら。今度やつたら、金玉を切り取って食べるからね」

「……」

もう逆らう気力は残っていない颯介は、ただ黙って頷く。

「いい子だ。お前の全てを喰わせてもらおうよ」

「……」

「あああああつ！」

颯介は、時間の流れも怪しい空間で延々と犯され続け、腹が膨れるほどの精液を流し込まれたあげく、ついには、その精液をアナルから吹きだしながら再び意識を失った。



「いやあつ、いやあだあつ」

龍次郎は、駄々っ子のように首を振りながら、熱に浮かされたような口調で必死に抵抗するが、龍次郎のアナルに入れられたミコトの右手の人差し指と中指は、グリグリと龍次郎のアナルを押し開いて慣らししていく。

「もう一本、追加」

ご機嫌なミコトの言葉と同時に、さらにもう一本、薬指が龍次郎のアナルに挿入される。

「あああつ、いやあつ」

龍次郎の悲鳴は一段と高くなるが、氷の床に寝かされたまま両手を頭上で縛られ、両足を縄で吊られたままの状態では、全く身動きができなかった。

「ナニが嫌なんだい？せつかくオレが、チンポを挿れても痛くないように、丁寧にお前の尻の穴を解してやってるのに。自分で言うのもなんだけど、こんな甘くてやさしい邪神サマは、そうはいないよ」

ミコトは、いかにも心外だという表情で、龍次郎の金玉を爪弾く。

「それに、白蛇の毒のおかげで、もう、快感しか感じてないはずだよ」

「でもおつ、おれつ、まだっ」

泣きそうな顔で言いよどむ龍次郎を見て、ミコトは満足げな笑みを浮かべて頷く。

「いいね！いい顔だ。やはり、お前は期待通り、いじめ甲斐がある良い顔をしてくれる。颯介は、体は極上だけど、いまいち可愛げが無いからね。その分、お前を思いつきり虐めて泣かせてやるからね！」

心底嬉しそうな顔で言いながら、ミコトは龍次郎のアナルに入れた三本の指をガバツと開く。

「っひいあつ」

「そろそろ良いね。じゃあ、お前の『お初』をいただくか」

「いやだあつ！」

ひととき大きい龍次郎の叫び声が響き渡り、ミコトはニヤリと笑う。

「なぜだい？本当は、チンポを入れて欲しくてたまらないだろう？」

「でも、だつてっ、おれっ、まだ、初めてでっ」

「初体験だから？むしろ、だからこそ喰うんだよ。初物男子の肉体ほど美味しいものは無いからね。特に尻の穴は絶品なんだ」

「でもおつ」

「…オレはカミサマだからね。お前の頭の中なんて、とくに全部見てるんだよ。お前の短い人生の中で、恥かしいことや忘れたいこと、家族にも内緒にしている秘密。全部知ってる」

とうとう泣き出す寸前の龍次郎に、ミコトは意地悪く笑いながら、顔を覗き込むようにして囁く。

「…お前が、偶然見た颯介の全裸をおかずにオナニーしていると、よりにもよって本人に見られたとか、禪に着替えるときも、颯介のチンポが気になって手間取った、とかね」

「…っ！」

「言ってみなよ。お前の気持ちを自分の口で言つて、オレに聞かせて。それもあるべく卑猥に、恥かしい言い方だね。上手くいえたら、イイコトがあるかもよ？」

「…ううっ」

ミコトの体に不釣り合いなズル剥けペニスが龍次郎のアナルに宛がわれる。その、まだ勃起していなかったペニスが、どんどん大きく硬くなっていくのが龍次郎にも良くわかった。

そして、ついに龍次郎は腹を括って生唾を飲む。

「…おつ、おれ、颯介さんが好きだっ！だから初めてのセックスは颯介さんとしたいっ！尻の穴に、颯介さんのチンポが欲しいっ！」

「うん。まあ、大甘でかるうじて合格だね。じゃあ、ご褒美」

そう言った瞬間、ミコトの勃起したペニスが、龍次郎のアナルに根元まで一息に挿入された。



「うあああつ！」

「あはははははつ！」

龍次郎の絶望的な悲鳴と、ミコトの高笑いが同時に響き渡る。

「お前の『お初』はオレが貰ったよ！ 颯介じゃなくて残念でした！」

「あああつ、んんっ」

ついに泣き出した龍次郎は、ボロボロと涙をこぼしながら喘ぐ。

「ふふふっ、いいね！ 今度は、その顔を快感でぐちゃぐちゃにしてあげる！ 初恋の颯介のチンポじゃなくて、オレのチンポでね」

「ひあつ〜！」

ミコトは激しく腰を前後に動かして、体格に不釣り合いな太くて長いズル剥け勃起ペニスを激しく出し入れし始める。

さらに、右手で龍次郎の包茎ペニスを剥きあげて、ピンクの龟头をグリグリと揉み潰す。

「はあつう、ああつ…！」

白蛇の毒で全身がきわめて敏感な性感帯になっている龍次郎は、アナルとペニスへの直接的で暴力的な刺激による快感に、悶絶してのた打ち回った。

「うん、いい肉穴だ。最高だよ！ じゃあ、最初の一発を出すよ。お前が生まれて初めて流し込まれる精液だ。じっくり味わってね！ 颯介のじゃなくて気の毒だけど！」

ミコトはそう言っただけで意地悪く笑い、龍次郎がさらに悲しい顔をするのを確かめてから、ペニスを乱暴に根元まで挿入して射精する。

「あああああつ」

龍次郎の悲しい悲鳴にミコトの笑い声が被さった。

「う。…ん？…なんだ？」

颯介は耳に響く声に眉をひそめて呻いた。

「…え？ あれ？…あつ」

そして、徐々に覚醒していく意識の中で、自分の身に起こったことを思い出していく。

寒みそぎの後、洞窟の中で御神石に注連縄を掛けようとして、ミコトに言われるまま、御神石を動かして…。

「…そうだ、ミコトにっ」

犯されたのだ。生まれて初めて、尻の穴に男のチンポを突っ込まれて射精され、しかも、白蛇の毒のせいでその快感に溺れて、延々と醜態をさらした挙句に、絶頂のまま気を失った。

「くそうっ」

全身にこびりついた乾いた精液の不快感と、まだ何か入っているようなアナルの感覚が、夢ではないことを颯介に思い知らせる。

「…龍次郎？」

完全に覚醒した颯介の耳に、知っている人間の泣き声が入った。

まだ全身に違和感のある体を無理やり起こして見ると、自分が寝かされていた凍った地面から五メートルも離れていない場所で、同じように地面に寝かされた龍次郎が、泣きながらミコトに犯されていた。

「龍次郎っ！」

おもわず叫んだ颯介に、白蛇の毒が効いている龍次郎は気づかず、ミコトだけが振り向いてニヤリと笑う。

「もう起きたんだ、すごいね。もうちょっとだから待っててね！」

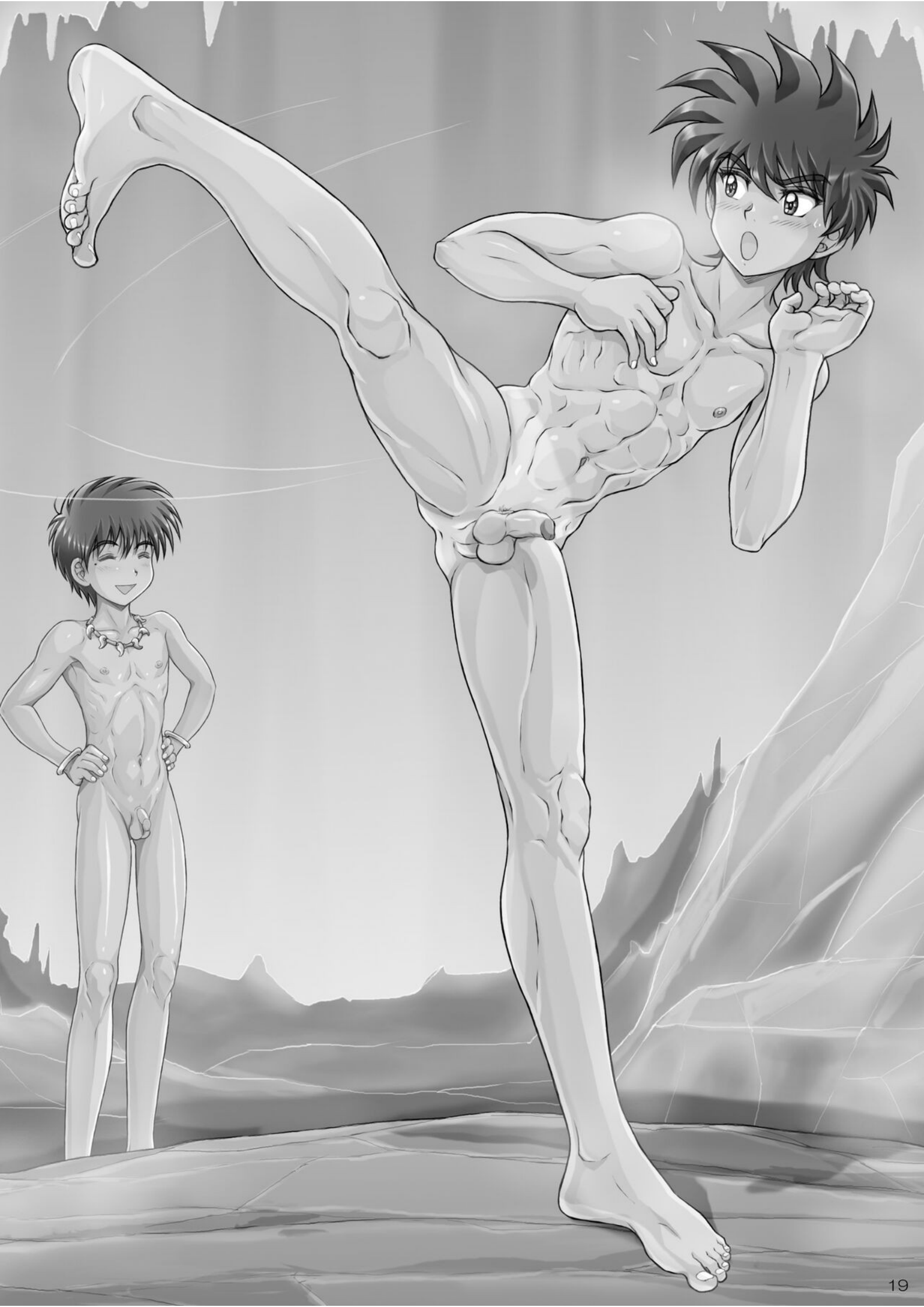
そう言うと、ミコトは既に縄を解いていた龍次郎を軽々とひっくり返して、さらにいつそう深くペニスを挿入して射精を始めた。

「っ！ このおっ！ ったあつ！」

激昂した颯介は、悲鳴を上げる肉体に鞭を撃って、ミコトとの距離を一気に詰めると、渾身の回し蹴りを繰り出した！

「っ！ なに？」

次の瞬間、龍次郎にチンポを入れていたはずのミコトは、一瞬で消えて颯介の背後に立って笑っていた。



「へえ、もうそこまで動けるんだ。すごいね！」

本当に関心した口調で、ミコトは悠然と構えている。

あらためてよく見た全裸のミコトは、どう見ても龍次郎と同年代の少年にしか見えず、白い肌に細身の体は、三人の中では一番貧弱そうに見えた。

ただ、チンポは完全に剥けていて、包茎でコードモチンポの龍次郎とは大違いだった。

「チクショウっ！」

颯介は、さらに鋭い蹴りと突きを、ミコトに向かって矢継ぎ早に繰り出していく。違和感のあつた体もキレが戻ってきて、精度も威力も尻上がりに増していった。

しかし、一発もミコトに当たらない。

正確に言えば、タイミング的には確実に当たっているはずなのに、当たる瞬間にミコトが『消える』のだ。

そして、ありえない場所にぱつと現れては、颯介を挑発するということを繰り返した。

「そろそろ、諦めたらどうだい？」

「つくそ！」

十五分以上も続いた一方的な攻防は、苦笑するミコトの前に、颯介が膝から崩れ落ちて終わった。

颯介は、ミコトが人間では無いということを、そして、おそらくは本当に『カミサマ』だということを、…それがたとえ邪神だとしても、認めざるを得なかった。

暗闇の渦に落ちてから今まで、現実とは思えない悪夢の連続だったが、心のどこかで、まだ現実として受け入れられないでいたのだ。

しかし、ミコトの動きが人間では絶対に有り得ない事を、空手家としての自分が、身体で納得してしまった。

そして、現実として受け入れてしまうと、今度は言いようの無い恐怖と、多くの疑問が湧き上がってきた。

「…なんでこんなことを？それにココはどこなんだ？」

湧き上がる感情と疑問を必死に言葉にしたが、いかにも陳腐で颯介自身もがっかりだった。

「お前、というか、お前たちは、自分たちが行った神事の縁起も意味も知らないで参加してたのかい？」

心底呆れた様子で、ミコトは肩を竦める。

「…昔やってた祭りを復活させるって事と、その祭りは、住民に悪さをした邪神を封じた石を奉るものだって事は聞いたけど…」

「まったく、嘆かわしいね。肝心な所がほとんど抜けてるじゃないか」
不満そうに言う颯介に、ミコトは苦笑してワザとらしくうな垂れる。

「まあ、封じられてた邪神のオレが言うのもなんだけど、祭りの縁起を教えろあげよう」

そう言うてミコトが語った内容は、颯介にとっては衝撃的だった。

遙か昔、ミコトは現在の竹鋸村のある土地に住む人間たちを、神通力を使って災害を起こして脅迫し、毎年、十代前半の少年を生贄として差し出させていたというのだ。

「いけにえ…」

禍々しい単語に、颯介は表情が硬くなる。

「そう。で、その生贄の関係でちよつと調子に乗りすぎて、旅の行者に封印されちゃったんだよね」

しかし、生贄を食っていたミコト自身は、妙に軽い調子で笑いながら、説明を続けた。

旅の行者が御神石の力を使って、ミコトを道端の石仏に封印した後は、地元の間人がずっと御神石と石仏を奉って守ってきたが、特に御神石は神社で奉り、毎年、生贄になるはずだった少年が身を清めて護符と注連縄を収めるという神事になったということだった。

「まあ、やりすぎた自覚はあったから、しばらくは自重して、おとなしくしてたんだけどね。そのうち、存在自体を忘れられちゃって、さすがに寂しい思いをしてたら、今日になって、石仏であるオレの上に座るといふ不届き者が現れてね」

ミコトは笑いながら、精液塗れになって気絶している龍次郎を見た。

「あっ！」

ミコトの言葉に、颯介はある事に気がついてミコトの顔を見る。

「…まさかっ…」

やはり、ミコトの顔にある泣き黒子の位置に、見覚えがあった。

「…まさか、あの時の石仏？」

今日、村外れにある神社最寄のバス停で、龍次郎と二人で迎えを待っていた時に、龍次郎がバス停脇にあった石仏に座ったので注意したのだ。

そして、その石仏には泣き黒子があったので、かなり印象に残っていた。

「正解。あれが、オレの封印されていた石仏だよ」

ミコトは嬉しそうに笑いながら、まだ膝立ちのままの颯介に近寄って、右手で颯介の左の頬を撫でる。

「その不届き者たちを良く見たら、かなり上玉の美味そうな初物男子が二人だったんでね、久しぶりに心から『喰いたい』と思ったよ。そうしたら、忘れられた祭が復活して、この二人が生贄の役だというじゃないか。これはもう、喰うしかないでしょ」

肉食獣が獲物を見る目で見つめられ、颯介は声も出せない。

さらにミコトは、残酷な事実を楽しそうに通告する。

「ちなみに、ここは、御神石の百メートル地下にある氷の洞窟で、地上には繋がっていないから、オレがその気にならない限り、お前たちは地上に出られないよ」

「っそんなっ…！」

絶望的な状況に呆然と立ち尽くす颯介の目の前で、ミコトの目が赤く光って、一転して凶悪な笑みが浮ぶ。

「…自分の立場を理解したところで、カミサマに蹴りつけ殴りかかったお仕置きをしようか」

「えっ？、うあああああっ！」

ミコトの全身が激しく光り輝いた次の瞬間、颯介の視界が一変した。

「こんなっ、うそだろっ…」

颯介の身体は、巨大な手のひらの上に乗せられて、目の前には、大仏のように巨大な顔のミコトが笑っているのだ。

「もちろん本当だよ？これでお前は、文字通りオレの手のひらの上ってことだね！ちなみに、お前が小さくなったんじゃないかって、オレが大きくなってるからね」

「っあ！」

無邪気に笑うミコトの巨大な左手は、大きな氷柱を針のように持って、颯介のアナルに押し当ててくる。

「それじゃ、肉人形の颯介君で遊ぼうかな！良い子にしないと、握り潰すからね！まずは、潔く尻の穴を差し出して」

「くっ…あああっ！」

観念した颯介が、脚を開いてアナルの差し出して力を抜くと、すかさず太い氷柱が奥深くまで挿し込まれる。氷柱は絶妙な角度で前立腺を抉り、颯介のペニスはポンッと勃起して透明な粘液を漏した。

その颯介のペニスを、巨大なミコトの指が摘んで引っ張る。

「ざああっ、やめっ！」

「あ、痛かった？まあしょうがないね。もげたり潰れたりしたら、そういう運命だったと思って諦めてね」

冷たくそう言い放ったミコトは、そのままチンポを弄り続け、さらに乳首も揉み始める。

「うわあっ！」

颯介は『壊される』恐怖と強制的な快感を同時に与えられながら、文字通り肉人形として延々と遊ばれ続けた。







「ぎやああああっ！」

「颯介さんっ！」

意識を取り戻した龍次郎が呆然と見上げる前で、ミコトに文字通りおもちやにされていた颯介は、絶叫しながら失禁して再び気絶した。
金玉を、巨大な指先でコリコリと揉みこまれたのだ。

「お仕置き終了！」

普通の大きさに戻ったミコトは、相変わらず軽い口調で言いながら、気絶した颯介を氷の地面に横たえた。

「颯介さんっ！」

龍次郎は慌てて颯介に駆け寄り、心配そうに颯介を覗き込む。

「大丈夫、生きてるし、金玉もまだ潰れてないよ」

ミコトの言葉にホッと胸を撫で下ろしながらも、龍次郎はミコトを睨み付けた。

「ふふんっ、そんな目をしていられるのも、今のうちだけだよ。今度は、お前をお仕置きしなきゃね！」

再び赤く光ったミコトの目が、龍次郎を見据えた。

「ひああああっ！」

「あはははっ！特製の氷木馬の具合はどうだい？最高だろう！」

龍次郎は、氷で作られた三角木馬に乗せられていた。

後ろ手に縄で縛られた上に、その縄がさらに左右の足首に繋がれていて、まったく身動きができない。

さらに、首にも縄がかけられ、その縄の先はミコトが握っていた。

「くそおっ！」

龍次郎は歯を食いしばって耐えているが、鋭角な氷が股間を痛めつける激痛と、両足とチンポに密着する氷の痛いほどの冷たさに、既に涙をためて半泣き状態になっている。

「じつくり味わうといいよ。この氷木馬は、オレが神通力で作ったものだから、いくら時間が経っても頂点の角度は鋭角なままだし、両足とチンポをびったり包み込む形にだけ溶けて、それ以上はずっと溶けないからね！」

そう言って楽しそうに笑うミコトは、やはり全裸に勾玉の首輪と腕輪のみの姿で、体格に不釣り合いな立派なズル剥けチンポを勃起させて、透明な粘液をだらだら垂らしている。

そして、龍次郎の肩に手を置くと、さらに残酷な言葉を突きつける。

「あと、お前の体にも今、神通力をかけて、決して凍傷にはならないようにしたから。その代わり、感覚もけっして麻痺しないし、痛みにも絶対慣れることは無いからね。つまり、絶対溶けない氷木馬の激痛と冷たさを、そのままずっと味わい続けるんだ！最高でしょ！」

「うぐうっ！」

龍次郎は、絶望的な表情で天を仰いで呻くのが精一杯だった。

「まあ、石仏を尻の下にするような罰当たりな男の子には、最適なお仕置きだよね！ほら、なんとか言ってみなよ！」

ミコトは肩に置いた手に、全体重以上の力をかけて、龍次郎を氷木馬に押し付けた。

「ぎやああああっ！」

「ぎやあ、じゃないでしょ！ごめんなさいは？」

「っ、ご、ごめんなさいっ」

「反省だけならサルでも出来るんだよ？お詫びに金玉食べてもいいです、くらい言えないの？」

「えっ？」

「お前くらいの歳の男子の金玉って美味いんだよ？」

「そ、そんなっ……」

「……まあ、いいや。しばらくこのまま反省してなよね」

ミコトはニヤリと笑うと、龍次郎をそのまま放置して、気絶している颯介の方へ向かった。



『おい！そろそろ起きろー！』

「…っん？…あ！」

耳のすぐそばで怒鳴られて意識を取り戻した颯介は、今度はすぐに全てを思い出して、慌てて自分の股間を確かめる。

自分は、巨大化したミニコトに文字通りおもちやにされて、金玉を潰されて意識を失ったのだ！

「…えっ？」

慌てて見た自分の股間には、ちゃんと金玉が二つ付いていて、潰れてはいないようだった。それは良かった。良かったが…

『やっと起きたな！おそいぞ！起きてないと弄り甲斐がないからな』

その颯介のチンポに、手のひらサイズのミニコトそっくりの全裸の生物が二匹取り付いていて、一匹は、いつのまにか勃起していたペニスの剥けた龟头を抱えていて、もう一匹は、陰毛の上に座っていた。

「なんだこりやつ！」

『もちろん、オレだよ』

颯介の右肩から声がして、驚いて振り向くと、同じような手のひらサイズのミニコトが颯介の肩に座って笑っていた。

こちらのミニミコトは、チンポに取り付いている二匹とは違い、勾玉の首飾りと腕輪をしている。

『全部オレの分身だよ。で、オレが本体さ』

「えええっ？」

良く見ると、チンポだけではなく、全身に二十四近いミニミコトが取り付いていた！

颯介自身は、後ろ手に胸ごと縄で縛られ、さらに両足もそれぞれ畳んだまま括られて、氷の岩壁に背中を預けた形でM字に開脚させられていて、まったく身動きが取れなかった。

そんな状態の颯介の体に、全裸でチンポを勃起させた手のひらサイズのミニミコトがわらわらと取り付いているのだ。

しかも、アナルには、また太い氷柱が挿入されていて、ミニミコトが数匹取り付いてさらに押し込もうとしていた。

「つな、なんでこんな？」

既に、悪夢のような散々な目にあっている颯介も、目を白黒させてうろたえるばかりだ。

『さっきの続きだよ！お前の体で遊んでやるのさ！』

『おとなしくしてろよ！暴れたら金玉喰うぞ！』

『金玉喰いたいから、暴れてもいいぞ！』

ミニミコトたちは、口々に好きなことを言っ、本当に颯介の体で遊び始めた。

「ついつてえ！」

チンポで龟头を抱えていたヤツが、尿道に腕を突っ込んで、尿道の中をかき回し始めた！

そして陰毛に座っていたヤツは陰毛を一本ずつ抜こうとし、胸に取り付いたヤツは、右の乳首を強引に摘み上げて勃起させて噛み付き、足元のヤツは小便をかけている。

さらに、アナルに挿入された氷柱に取り付いたヤツらは、本格的に氷柱を押し込み始め、新たにチンポに寄ってきた二匹は、金玉をサンドバックに見立て、左右からパンチを繰り出す。

その他、二十四近いミニミコトが、文字通り颯介の体をおもちやにして好き放題遊びまくった。

「あつー！」

個々のダメージは大きくなくても、全身を一斉に、しかもチンポやアナルなど弱点を的確に攻撃されていて、想像以上に辛かった。

かといって、身動きすることも出来ないため、エスカレートする仕打ちにひたすら耐えるしかない。

「あつ、ううっ！」

そして、ミニミコトたちの思うがままに、射精を強要されるのだ。



「ああっ！ううっ」

龍次郎は、一人で必死に苦痛に耐えていた。

颯介の悲鳴は聞こえるのだが、その姿は見えず、自分をこんな目に合わせているミコトも居ない。

不可思議な光る氷柱の明かりが、龍次郎の周りだけを照らし出していて、その周囲は真つ暗な暗闇だった。

そんな場所に、事実上一人で取り残された龍次郎は、ミコトの神通力のせいで、溶けない氷木馬の激痛と痛いほどの冷たさに延々と苦しめられているのだ。

しかし龍次郎は、そんな絶え間ない苦痛の中でも、ふと鼻を突いた生臭い臭いで異変に気づいた。

「いやだあっ！来るなあっ！」

龍次郎は、あまりの恐怖に、氷木馬の苦痛も忘れて必死に叫んだ。

洞窟の奥の暗闇から、軽自動車ほどもある巨大な肉色のナメクジのような生物が、にちやにちやと粘着質な音をたてて、身動きできない龍次郎にむかってどんどん近づいてくる！

「颯介さん！ミコトっ！助けて！」

ミコトにすら助けを求めるほど、龍次郎は恐怖に我を忘れていた。

目の前にまで近づいた巨大な肉色のナメクジから、粘液で不気味に光る肉色の触手が何本も龍次郎に向かって伸びてきた！

「うわあああっ！」

ついに、触手が龍次郎の体に巻きつく。

生暖かくぬめりのある触手の感触は言いようもないくらい不快で、さらに不気味に脈動して龍次郎の体を這い回った。

「ええっ？あああ！」

そして、触手から分泌された粘液が龍次郎を拘束していた縄を溶かし、氷木馬から龍次郎を開放するが、同時に触手によって絡め取られて、氷木馬から持ち上げられてしまう。

「いやだあああっ！」

触手によって空中に持ち上げられた龍次郎に、太さも長さも様々なさらに多くの触手が絡み付いていく。

「ひいいいあああっ！」

絡み付いた全ての触手が、龍次郎の全身をくまなく這い回り、やがてそれらの動きはチンポとアナルと乳首の三点に集約していく。

「あっ！あああんっ！」

一番太い触手が、突然、龍次郎のアナルに潜り込んだ。

そして同時に、細い触手数本が、龍次郎のペニスと金玉に巻き付いて、うねうねと脈動をする。

さらに、細い触手がさらにもう一本、龍次郎のアナルに潜り込み、別の触手が乳首に吸い付く。

「はあああっん！あああっ！」

アナルに潜り込んだ触手は直腸内で激しく動き回って前立腺を連打し、ペニスに巻きついた触手は尿道までも犯しながら扱きたて、乳首に吸い付いた触手は乳首を強力に吸い上げて勃起させた。

「はあっ、ううっ！」

触手の苛烈な愛撫の前に、龍次郎はあっという間に射精する。

「…もう、いやだあああっ！」

龍次郎はボロボロ泣きながら叫ぶが、触手は一切容赦せずに、さらに過酷に龍次郎の肉体を蹂躪していく。

アナルに侵入している触手はさらに奥深くまで入り、尿道を犯している触手は膀胱まで到達した。

さらに口からも太い触手が侵入して一気に胃まで達してしまう。

「うごおっ」

内臓の奥深くまで犯された龍次郎の体内に、侵入した触手から、何かの液体が大量に流し込まれた。



『あつ、もうアイツが来ちゃったゾ!』

『早いな!もつとコイツの体で遊んでいたいのに!』

『チクショウ!結局、コイツの金玉喰えなかった!』

『だから今回は金玉は駄目だっていつてるだろ!』

『でもお!』

『おいしいっ!もうちよつとで足首が尿道に入るのに!』

『こっちも、勃った乳首を糸で縛って、ぶら下がるつもりだったのに!』

『もう少しで、へそのゴマを全部掘り出せるんだけど!』

『チン毛は、全部抜くまでまだまだ時間かかるなあ』

『金玉の千本ノック、まだ半分以上残ってるんだけど!』

『尻の穴の氷柱をもつと太くてゴツゴツしたやつに取替えたかった!』

『取り替えなくても、そのままう一本挿しちゃえ!』

『どっちにしても、もう間に合わないって!』

『やっぱり、まだまだ遊び足りないあい!』

颯介の身体でやりたい放題に遊んでいたミニミコトたちが、突然、好き勝手なことを言いながら慌て始めた。

『でも、もうおしまい!早く離れなきゃ、オレ達まで喰われるぞ!』

勾玉の首飾りと腕輪を着けているミコトの本体が、他のミニミコト達にそう言つて号令を掛けると、ミニミコト達は一斉にわらわらと颯介の身体から下りて一箇所に集まった。

そして、ポンポンと音をたてて合体し、大きくなっていく。

『お遊びはここまでだよ。オレからの贈り物を受け取ってね!』

颯介の右肩に乗っていたミニミコトの本体は、そう颯介の右の耳に囁いてから飛び降りると、合体してどんどん大きくなっていくミニミコトの固まりに、一番最後に合体する。

「じゃあ、また後で!」

元の大きさに戻ったミコトは、そう言つて意味深に笑うと、M字開脚で拘束されたままの颯介を置き去りにして、パツと消えてしまった。

「おつ、おいっ!待てて!」

ミニミコト達の情け容赦ない悪戯に必死で耐えていた颯介は、あつという間に一人で放置され、ただ呆然とするしかなかった。

「...龍次郎っ!」

しかし、すぐにその意味を悟つて、絶望的な気分为天を仰ぐ。

暗闇の中から、巨大な肉色のナメクジのような生物と、その触手に囚われて気を失っている龍次郎が現れたのだ。

「...チクショウっ!」

縛られて身動きのできない颯介は、不気味に迫ってくる何本もの濡れ光る触手を睨み付けながら、腹の底から叫んだ。

「ううっ、あつ!...はあつはあつ」

颯介は、苦痛でしかない四回目の強制的な射精をしてうな垂れた。

両手両足を触手に拘束されて空中で大の字に広げられ、アナルに侵入した何本もの触手は、腹の中で暴れ周つて前立腺を苛烈に嬲り、さらにチンポや乳首など全身の性感帯を延々と嬲られて、颯介の意志に反した射精を強制され続けているのだ。

延々と続く苦痛に最初は耐えていた颯介も、ついに涙を流しながら呻き喘ぐことしか出来なくなっていた。

「...っな!そんなっ。無理だっ!...!壊れるっ!やめてくれっ!」

触手が尿道口を弄りはじめて、颯介は青くなる。しかし、ミニミコトの腕や足よりさらに太い触手は容赦なく颯介の尿道に侵入した。

「ぎゃあああああつ!...うがあつ!」

触手が尿道を通つて膀胱に到達するのと同時に、口からも触手が侵入して一気に胃を犯す。

「っんっ!」

颯介の体内に侵入した触手から、大量の液体が注ぎこまれた。



「…っ、ん。んん？…んあっ！」

息苦しさを目覚めた颯介は、口の中に押し込まれた異物に慌てた。

「あ、起きちゃった？って、痛っ、齒を立てるなっ！」

ミコトは、颯介の口に突っ込んでいた勃起ペニスを慌てて引き抜いて、またがっていた颯介の顔から下りる。

「つてめ、ナニをしてた！」

「お前が寝てる間にしゃぶらせようと思ったんだけどね！」

動転する颯介に、ミコトは悪びれずに笑う。

「ところで、オレの贈り物はどうだい？」

「贈り物って…？」

得意げに言うミコトに颯介は戸惑う。酷い目に遭わされているだけで、何も貰った覚えは無い。

「触手から、めいっばい飲ませてやったでしょ？」

「…あれが？」

確かに、触手に身体中の穴から侵入されて何かを流し込まれたが…。

「あれは、簡単に言う『神々の飲物』という類のものでね、お前たちの身体と体力を回復させ、精力と性欲を十倍に高めるものだよ」

ミコトの言葉に、颯介は慌てて自分の身体を見る。

テーパー状の岩に寝かされている身体は、精液と粘液に汚れてはいるが、確かにダメージを感じない。そして、数え切れないくらい射精したはずのペニスは、痛いほどに勃起して透明な粘液を零していた。

そして、自分の横に寝かされていた龍次郎も、まだ目覚めていないが包茎ペニスを完全勃起させていた。

「わかったら、さっさと龍次郎を犯してあげなよ」

「えっ？」

「お前の頭の中は全部見たよ。龍次郎のオナニーを目撃した時、龍次郎には気づかないフリをしたけど、本当は自分の名前を呼んでいたのを知っていたんだらう？」

「うそっ！」

突然、横で寝ていた龍次郎が叫ぶ。颯介が驚いて見ると、龍次郎は首まで真っ赤にして涙目になっていた。

「龍次郎…」

そんな龍次郎を見て、颯介は胸が熱くなって、さらに自分の勃起したペニスがポンと跳ねるのを自覚した。

「それに、ここから出たければ、セックスするしかないよ。十代の少年同士のセックスで生じる快感の感情がオレのエネルギーなんだ。エネルギーを補給しないと、お前たちを帰せない」

「龍次郎っ！」

ミコトの言葉に押されるように、颯介は突然、龍次郎を組み敷いて両足を上げさせ、自分のペニスを龍次郎のアナルに押し当てた。

「…いいか？」

「うん！入れて！俺のケツに颯介さんのチンポちようだい！」

颯介の求めに、龍次郎は心底嬉しそうに即答し、颯介は、すかさず一気にペニスを龍次郎のアナルに根元まで挿入した。

「ああああんっ！」

龍次郎は、今までは違い、歓喜に満ちた悲鳴をあげて仰け反る。

「まあ、エネルギー云々は冗談だけど。あと、副作用で、効いてる間は性欲が暴走して理性が無くなるから。…つてもう聞いてないね」

ミコトはニヤリと笑いながら舌を出す。

龍次郎は夢にまで見た颯介のペニスの熱さに夢中になって、さらに自分で乳首を舐り包茎ペニスを抜いて快感を貪り、颯介は、初めてのアナルの味に我を忘れて激しく腰を動かして快感追い求め、龍次郎の腸内に射精することしか考えられなくなった。

そうして『神々の飲物』の力でセックスし続けた二人が、ようやくまともに言葉を交わしたのは六時間後だった。



「颯介さん、おれ、まだキスしたこと無いんだ…」

ようやくアナルからペニスを抜き、一息ついた二人の沈黙を破ったのは縄のような目をした龍次郎だった。

「…俺もだよ。…しようか？、いや、キスしよう」

ミコトのせいじゃなく、自分たちの意志でキスしたい。龍次郎の気持ちを察した颯介は、素直に自分もそうしたいと思った。

「…じゃあ…」

膝立ちで向かい合った颯介と龍次郎は、お互いの勃起したままのペニスが触れ合う距離まで近づいて、抱き合った。

そして、戸惑いながら、お互いの唇を近づけていく。

「…っん！」

あと五センチまでお互いの唇が近づいたところで、龍次郎が颯介の首に腕を回して一気に距離を詰め、唇を合わせた。

初めてのキスに、二人はさらにペニスを固くして透明な粘液を零す。

「おいっ！アレ見ろよ！すげーぞっ！」

「うおおっ！マジかよ！…って、アレって、神隠しにあったっていう二人じゃねえか？」

「あっ、ほんとだ！アイツらだ！」

「おい！カメラ回せ！カメラっ！」

幸福感に酔っている二人を突然、騒音が包みこむ。

「…っえ！」

地下の洞窟にいたはずの颯介と龍次郎は、いつのまにか、見慣れたバス停前の道路の真ん中で、大勢の人間とテレビカメラに囲まれていた！

あまりに突然の出来事に、ショックで固まっている二人の脳内に、聞きなれたミコトの声が直接響く。

『十分楽しんだから、帰してあげるよ。本当は、めいっばい良い思いをさせてから、お前たちの金玉を食べるつもりだったんだけどね。生きたまま、金玉をすり潰してジュースにしたり、生きたまま丸齧りしたりしてね！でも、お前たちのことが妙に気に入ったから、許してあげる。じゃあまたね！』

「颯介さん…」

「龍次郎…」

ほぼ全裸のまま、ペニスを勃起させて呆然と抱き合う二人を、テレビカメラと、取り囲んだ野次馬のカメラや携帯が撮影し続ける。

「石川代表！あそこです！」

知らせを受けて駆けつけた奉筈祭の主催者は、その様子を見て、大きなため息をつきながら天を仰いで呟いた。

「祭は終わった。永遠に」



平成の新しいお祭り!

竹鋸村

少年兜合わせ祭り

2012年開催予定

2012

参加者募集中〜♥

- 参加者全員に
特産竹の子一年分進呈!

あのキャラがお忍びでハハ、来村!



匿名希望のNちゃん



挑戦は新たなるステージへ！

竹鋸村の村おこしへの挑戦は、
奉筭祭の復活という形で実を結んだ。

しかし、自ら志願し、神事に挑んだ少年二人に、
何者かが卑劣な危害を加えて祭りを妨害するという、
予想外の残念な結末となった。

その顛末については、少年二人の画像とともに、
報道その他でご覧になった方も多いと思う。
結果として、村おこしという目的は果たせず、
その挑戦は完結していない。

しかし、竹鋸村を愛する我々の情熱は、
この程度の困難では失われることは決して無い。

そして、我々は新たな挑戦を開始した。
従来にはない、まったく新しい発想で、
新たな時代に相応しい、新しい祭りを創造するのだ！

奉筭祭で卑劣な悪漢の被害に遭い、
全世界に映像と画像が流出してしまった少年二人も、
きっと同じ気持ちで、賛同してくれることと思う。
そうであることを信じて、
今回の新しい祭りのポスターに、無断ではあるが、
彼らの写真を使わせてもらった。

また、奉筭祭のポスターに起用した少年も
きっと応援してくれることと思うので、
奉筭祭のポスター撮影時にちょっとだけ強引に撮影した、
未公開秘蔵写真を使用させてもらっている。

我々の新たな挑戦のために、そして竹鋸村の未来のために、
少年たちの瑞々しい肉体を提供してくれることを期待している。

竹鋸村振興協会一同



冬コミへお越しの皆様お疲れサム〜(〜)/
 いつもお世話になっております イラスト担当の筍屋です
 この度はこの本をお手にとって頂き 誠に有難うございました m(_ _)m
 それでなくても 毎回ギリギリの合同本なんです
 今年は秋イベントのカラミも有って さらにグダグダな状況でした(〜;
 内容的には 超常現象ペースで 今まで合同本ではやらなかったネタを
 色々実験的に取り入れてみただんですが
 ネタ的に詰める時間が無く かなり消化不良な感じです(〜;
 そんな訳で 不十分な点多々有るかと思いますが
 もし 何か一枚でも皆様お気に入りの絵が有りましたならば
 作者として この上ない幸甚であります m(_ _)m

2010年12月 筍屋

筍屋 takenokoya@yahoo.co.jp

竹藪館 <http://www.hi-ho.ne.jp/su-oh/keikoku.htm>

(御意見 御感想ありましたら宜しくお願いします)

追記

夏コミ本でこの欄に短髪キャラの愚痴を書いたら
 なんと 今回の主役の一人が短髪に!
 どうやら ここに書けば実現する模様なので書いておきましょう
 「来年は もっと楽な日程でやりたいなあ〜」

はじめまして&おひさしぶりです。
 へたれ文字書きのた〜んけーです m(_ _)m

寒い冬に、熱い本を!と思ったら、すごく寒そうな表紙になりました。
 内容は熱いぜ!と言いたいところですが、さてどうでしょう。
 少なくとも、いつもと少し毛色の違う作品になってたら嬉しいです。
 個人的には、小人さん達をもっと書き込みたかったですね。

日程については、気持ちとしては全面的に同意です(〜;
 ただ、こればかりは、今までずっと、結局は、
 たぶん、きっと、だといいなあ。の三段活用ですからねえ…

どこか一場面でも、皆さんの夢に触れられたら幸いです。

2010年12月31日 た〜んけー
 turn_k_vf@yahoo.co.jp

はじめまして この作品のタイトルを描かせていただきました、ひろレン!と申します。
 ふとした切欠から参加することになり、実力不足ゆえ
 つたないながらもなんとか形に仕上げることができました(〜;
 皆様楽しんでいただくためのお手伝いができたことを幸せに思っております。
 このような機会を与えてくださったお二方にも心より感謝致します。m(_ _)m

2010年12月 ひろレン!

なお お忙しい中 ログやチラシ編集で多大なご支援をして頂いた
 ひろレン!様には この場をお借りして御礼申し上げます m(_ _)m

筍屋&た〜んけー

初物男子の神隠し

2010年12月31日 初版発行
 発行/筍御飯&ぶあいふあむ
 著者/筍屋&た〜んけー
 デザイン/ひろレン!
 印刷所/株式会社 プロス(本文)
 関西美術印刷株式会社(表紙)
 連絡先/turn_k_vf@yahoo.co.jp

初物男子の
神隠し

笥御飯
&
ふあいふあむ

2010 winter





「すげえっ！あいつら、もう二分以上も浸かったままだぞ！」

見物人たちが感嘆にどよめく中、颯介たち三人は、両手を合わせて眼をつぶり、滝壺に身を沈めていた。

そして、三人が滝壺に身を沈めてから三分以上経って、ようやく合図の太鼓が打ち鳴らされる。

「ったああっ！」

颯介は、肩まで浸かっていた極寒の滝壺からゆっくり立ち上がると、ガクガク震える体を押さえ込むように、腹の底から気合を押し出した。

すぐそばでは、龍次郎も同じように奇声を発している。

そして、寒みそぎ開始直前に突然現れた、ミコトという名前以外は一切不明な三人目は、なぜか余裕の微笑みで颯介達を見ていた。

颯介と龍次郎の渾には注連縄が括りつけられていて、ただでさえ締め方のゆるい二人の渾をさらにゆるめ、さらに水に濡れた渾はかなり透けていて、三人のチンポの色と形がはっきりとわかった。

颯介にいたっては陰毛までほぼ見えている。

そんな状態の三人は、見物人たちのほか、地元テレビ局のカメラも注目するなかで、事前の打ち合わせで指示されたとおり浅瀬に進み出た。

そして、結果的には見物人やテレビカメラの正面になったが、御神石のある洞窟の方角に向いて、直立不動で両手を合わせて眼をつぶり、深々とお辞儀をする。

三人がゆっくりと体を起こすと、それまで川べりを覆っていた厳かな雰囲気気が和らぎ、見物人たちから拍手が沸きあがった。

「っさあみいっ！」

拍手とほぼ同時に吹き抜けた風に、全身ずぶ濡れの龍次郎は思わず悲鳴をあげて身を屈めてしまい、見物人たちは一転笑いに包まれる。

「まだ終わってねえんだぞっ！縮み上がるのはチンポだけにしろ！」

そう言う颯介も、ガタガタと体の震えがとまらない。

「うっせえ！テメエには言われたくねえよっ！テメエこそ、ただでさえ粗末なチンポが縮んで隙間からこぼれてるぜっ！」

「ほおっ？！ポークビッツなオナニー小僧が言うじゃねえか」

「つにやろうっ！またそればかり！ぶっころす！」

龍次郎は、寒さで赤くなった顔をさらに紅潮させ、右足で川の水を蹴り上げて颯介に浴びせかけた。

「うあっぷ！このやろうっ！」

不意を突かれて顔面に水が直撃した颯介は、すかさず数倍強力な蹴りで反撃して、大量の水を龍次郎に叩きつける。

「うあっ！うおおっ！」

颯介の反撃に体勢を崩しかけた龍次郎は、今度は両手を使って立て続けに水を颯介に浴びせ始め、颯介も同じように反撃して、そのまま水の掛け合いになる。

『やべえっ、やっちゃまった』

見物人たちは、水掛合戦も『奉筈祭』の神事の一つと誤解して沸き立っているが、颯介は、龍次郎に応戦しながらも内心舌打ちする。

龍次郎は、空手部のライバルで親友の虎太郎の弟なのだが、重度のブラコンらしく、以前から、なにかと颯介に突っかかってくるのだ。

特に先月、虎太郎の家に遊びに行った際に、龍次郎のオナニーを目撃してしまっただけは、目の敵にされていた。

今日も、神社側との待ち合わせ場所だった、神社に最寄のバス停で神社側の迎えを待っている間、ずっと憎まれ口を叩かれていたのだ。

颯介自身はずっと『大人の対応』をしていたつもりだったが、自分自身が余裕の無い状況で、つい口が滑ってしまった。

「そろそろ、次に行こうよ」

そんな状況に、思わぬ助け舟が入った。三人目のミコトが、絶妙のタイミングで二人の間に割って入ったのだ。